

# 全員主役。 1人ひとりが輝く会社に

—株式会社沖縄教育出版—

職場  
レポート

WORKSHOP  
REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



配送センター

株式会社沖縄教育出版

〒900-0013 沖縄県那覇市牧志1-2-24  
TEL 098-866-4779 FAX 098-867-6677  
URL <http://www.cha-genki.co.jp>

がんを体験  
「お役立ちの経営」へ

沖縄県那覇市のメインストリート、国際通りのほぼ中央に「株式会社沖縄教育出版」がある。ビル5階と6階が「沖縄自然館」の名で展開する健康食品の「チャーげんき事業部」と化粧品部の「真粧品事業部」のオフィスだ。

「メンタル面がいちばん大事」という社長の川畑保夫さんは、写真やホームページで拝見するよりもさらにお元気そうで、生き生きとしたエネルギーを感じさせる。

川畑さんは1977年に「沖縄教育出版」を創業、出版事業をスタートさせた。

「沖縄は本土と違いますから、最初に買っていたいただいたお客さんを大事にして、植物図鑑の次は海、歴史……などと出版していきました。当時も社の理念は掲げていたのですが、実際は儲けたいとか会社を大きくしたいとか、理念とかは離れていたと思います。出版の流通革命を考えて、次に鹿児島教育出版を作ったのですが、そのうちにストレスから『腎臓がん』になりました」と川畑さんは言う。

国立がんセンターに入院。がんの告知を受け止め、何をやるかではなく、何の



川畑保夫社長

ためにやるかを考えた。

「生きていくことには限りがある。生命体は宇宙からの借り物で必ず土に帰るが、命は受け継いでいくもの。沖縄の強みは長寿世界一です。自分のがん体験を通して、お役立ちの経営をしたいと健康食品の事業部を立ち上げました。さらに肌と心と環境にやさしい化粧品を作りたいと真粧品事業部をスタートしました」

94年に立ち上げた「沖縄自然館」では、沖縄のウコン、玄米酵素、もろみ酢などを原料にした健康食品と、自然の素材を生かした化粧品を扱っている。従業員は151名。自己資本比率95%超。年間経常利益は3〜4億円と、事業は順調に発展してきた。

企業理念について、川畑さんは「地球上に住むすべての人々が健康で平和に暮らせる社会をつくるため、みんなで力を合わせて、働きがいのある楽しい職場環境を創り、お役立ちの喜びを実践するこ

と。五徳の中で特に仁を大切にしています。文化や教育などのCSRに力を入れ、地域のコンサートやシンポジウムにもボランティアで協力しています」と語る。

社内ではお互いをファーストネームで呼ぶ。川畑保夫社長は「保夫さん」。呼び方が定着するまで練習をしたそう。

「労使は対等な関係、パートナーですから、『さん』づけです。障害と健常、パートと正社員の枠組みを超えて、『共に学び、共に育ち、共に働き、共に生きる』社会の実現を目指しています。正しいことを正しく行えば、正しい結果が出ます。人間尊重の理念で経営すれば、必ず結果は出るはずですよ」

障害者はパートナー  
多様性のある企業は強い

川畑さんが中学1年生のとき、カリエス（骨の慢性炎症）を患っていた年上の同級生と仲よしだった。障害児教育に長年携わった鹿児島大学の校長先生との接点があった。しかし障害者雇用の直接の動機は、講演に感銘を受けたことだと川畑さんは言う。

「一番のきっかけは、2000年2月にオムロンの立石一真会長の講演を聞いて感動したことです。その年の10月には大分の別府太陽の家に行つて、ホンダ太



まずは、オリジナルのワッショイ体操、ハッピー体操で朝礼が始まる

陽社長の鈴木さんから、「心身に障害があっても仕事に障害はない。税金の消費者から納税者に」という話を聞き、私も障害者を雇用しようと思いました」

01年に軽度と中・重度の養護学校に出入社した2人が面倒を見ることにした。川畑さんは「障害者はパートナー、対等な関係」と考えた。

「私という存在は世界でただ1人。違いを認め、1人ひとりの天分を生かすと、どんな人も可能指数は200持っている。能力とは、誰でもできることをやり続けること。知的障害者は一度やり始めるとコツコツとやりぬき、私たちのほうが逆に3日坊主という体内時計を持っている。彼らは、今を一生懸命に生きています。10年偉大なり、20年恐るべしです」

1期生を雇用してからまもなく10年。1人が世話人、1人がサブ世話人として、仕事をリードできるまでになった。その変化は、川畑さんも当初予想していなかったという。

「最初は、自分の名前を言った後、言葉が出てきませんでした。今は受け答えと気配りもできるようになり、戦力となっていてます。当時を思うと信じられないですね。人間の能力は、いかにスイッチが入っているかどうかです。1人ひとりがその気になることが一番大切だと思います」

待遇は社員で、給料は13〜14万円。プラス障害者年金が約7万円。一家の大黒柱にな

っている人も多い。毎月1日は、ネクタイを締めて出勤する。

「その姿を見れば、親もどんなにうれしか」と川畑さん。

「働き始めてしばらく経つと、お母さんたちがおしゃれになりました。このままではいけないと考えて、通帳は会社、印鑑は親で、毎月3万円ずつ財形貯蓄をしています。親や先生、寮母さんと呼んで感謝の夕べをしていますね、彼らが成長していくと、親も成長していますね」

「二流と付き合うと一流になる」が川畑さんの持論だ。

「どんな勉強会も、県外の企業視察も一緒。彼らはわからないからと分けなないで、同じようにチャンスを与える。朝礼のファシリテーター（司会者）も一緒です。そうすると成長します。社会は多様性がありますが、企業も多様性があつたほうが強いし、楽しい。彼らがいるおかげで、毎日ドラマと感動があります」

いま沖縄教育出版社では、知的障害者9



人と聴覚障害者1人が働いている。

## 障害者がリーダーに 後輩を自ら育成できる組織に

総務部室長の長嶺さやかさんの案内で、オフィスから10分ほどの、沖縄都市モノレール（ゆいレール）が走る久茂地川沿いの「配送センター」を訪ねる。2階は健康食品の製作と配送で6人、1階は化粧品製作と配送で2人の知的障害者の人たちが働く。

企業の名を有名にしたのが「日本一楽しくて、長い朝礼」だ。月金は合同で、火水木はオフィスごとにその朝礼は行われる。訪れたのは木曜日。朝9時、障害のない方も含めて十数人の朝礼が始まった。

知的障害者9名、聴覚障害者1名が働く沖縄教育出版社



日本一楽しくて長い朝礼（デイリーアップ朝礼）、通常は1時間ほどだが、長いときは3時間になることもある



ファシリテーターは、いつもは総務で仕事をしていて、「げんき笑顔隊長」を任命されている入社3年目の知念政臣さん。「おはようございます」と手話を交えてあいさつ。2人1組のハッピー体操などの後、今年4月に入社した仲里治樹さんのリードで、朝の唱和。「〜私たちはみんなで力を合わせて、『人と人、人と自然、人と食の3つの健康のホームドクター』として、お得意様に生きる希望を届けていきます〜」

続いて今月の標語。全員で気合を入れて作業が始まる。それぞれの手際がいい。「おはようございます」と私たちにあいさつをしてくれた謝花喜和さんは、印刷物の折り機のスペシャリスト。

朝の唱和を担当した仲里さんは、「いろんな仕事をできるようにになりました。玄米酵素の箱詰めは、重いので大変です。仕事は楽しい。みんなと仲良くしています。ずっと働き続けたい」と笑顔。

障害者雇用の1期生のうちの1人、上原信弥さんは入社9年目で、2年前に製作チームの世話人（リーダー）になった。

「商品の製造がメインですが、配送が多いときは配送に回ります。注



総務で働く知念政臣さん。「げんき笑顔隊長」として朝礼を進行する

意していることは、商品にバーコードがきちんと張られているかどうかの確認です。みんながスムーズに動くので助かっています。みんなには手を早く、スピードを出してほしいと頼んでいます」と上原さんは自覚十分。会社紹介のパンフレットにも登場する上原さんは「沖縄教育出版は、明るくて元気があふ、家族みたいな会社。今は自分の役割で精一杯です。さちんとできるようにしたら、次のことを考えて、ずっと働き続けていきたいです」と言う。

「（上原）信弥さんは、後輩を育てるためにはどうしたらいいかを考えています。彼をお手本に、次は自分が世話人になるのだという気持ちで、みんな頑張っています」と長嶺さん。

360円、430円など細かい価格のお弁当の取りまとめをしていた饒平名

（よへな）達哉さんも1期生。今年4月からサブ世話人になった。配送センターの世話人（事業部長）の川畑旨史（よしふみ）さんは、「彼はすべての製作ができるので、製作の指導は任せておけば大丈夫です。サブになって、朝早く出勤したりと自覚が出てきた」と仕事ぶりを認める。

「仕事は慣れました。今の仕事が好きです」という1階で化粧品の製作と配送を担当する入社2年目の伊東江梨花さんが、クレンジング水のバーコードシールの印刷を頼みにきた。上原さんが機械を操作して、シールを打ち出す。

川畑旨史さんは社長の次男。「私は何もしていませんよ」と言いつつ、さりげなく気を配り、定期的に面談も行っている。

「些細な変化を見つけることが大事だと思います。仕事の面で注意することはあまりないのですが、コミュニケーションに気をつけています。障害を持っているからとは意識していません。社員ですから同じようにしかりますし、同じように接しています」

特別支援学校や作業所などからインターンシップ（職場実習）を受け入れています。その成長を見て、「環境は大事です。周囲の影響を受けて、集中できなかった子が黙々と仕事をできるようになり、先生がびっくりされています。2週





伊東江梨花さんのシール印刷を手伝う上原さん

入社して9年目、チームリーダーの上原信弥さん



## やさしさと思いやりの 企業文化がつけられた

望を届けられるか。与え尽くして、慈愛の種をまく。それが私たちの会社が持っている独特なものではないかと思えます」

一日1人1提案は、知的障害の人たちも一緒。川畑さんのもとに提案が届く。

「ABCもわからなかったのに、パソコンをやりたいと言いついて、仕事を終わった後に毎日続けて、7割の人はパソコンから提案を送ってきますよ。また社員全員の『今日ノート』があります。何時から何時までは何をやるという1日の目標と感想を毎日書いて、金曜日に提出します。私や役員がコメントを書いているので、全員の名前がフルネームでわかります」

上原さんは「全員の入社年月日と顔写



化粧品製の製造と配送を担当する伊東江梨花さん

真をボードにしたい」と提案。採用されたボードがオフィスに飾られている。

川畑さんは、「彼らだからできないという発想はありません。できないのではなくて、挑戦しないだけです。常に挑戦をさせていく。入社当初、話が全然かみ合わなかった自閉の人は、今は起承転結の話ができ、1つの仕事が終わった後は違う仕事をしています」と言う。

上原さんはまた、おばあちゃんの家に家族を連れて行きたいと運転免許に挑戦。学科試験は、仮免許は9回、本免許は17回も受験した。

「職員が毎日面倒を見ていたのですが、翌日の本免許の試験で同じ問題が出て合格。みんなでバンザイしました」と川畑さんはうれしそうだ。

紹介しきれないほどの川畑さんのさまざまな「語録」には、知的障害者と心が通じると思えるものがある。「感じていることは本音だから、自分に正直になっ

て、ホントに感じていることを相手に伝え、相手の心を揺さぶるところからスタートしよう」と話すこともその1つ。

「知的障害者は、本気で手抜きをしません。直球を投げます。彼らが今日を一生懸命生きていることがいい影響を与えています。今までは、品質と効率と規模を追いかければ会社はうまくいきまし



上原信弥さんが提案した全社員の顔写真入りボード

た。これからは人間関係の中でいかにお役に立つか。公益企業でないと人は応援しないと思います。いい社会をつくっていくというところで、みんなとつながっていくのと思っています。私たちがうれしいのは、朝礼研修にいられて障害者雇用を始めた企業が増えていくことです」川畑さんは、1つの願いを話してくれた。

「彼らがいることによって、やさしさと、思いやりの企業文化、土壌がつけられています。見習うことはいっぱいあります。障害者を30〜50人に増やして、彼らだけで経営ができるようなことに挑戦したいですね。彼らが増えてくれば、その中から役員をつくっても構わないわけですから」

川畑さんのその願いが実現したら、ぜひ再訪したいと思う取材だった。